
薔薇の独り言

岳石祭人

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

薔薇の独り言

【Nコード】

N5812D

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

超美人霊能力者に付き従う美貌のアシスタント。彼女の彼女への秘めたる想いの原点。芙蓉美貴の心情を綴る「紅倉美姫シリーズ」番外編。

伯父が亡くなった。

芙蓉の苦手としていた人だ。

嫌いなのではなく苦手なのだ。

人物はむしろ好いていた。当人はとうていそうは思っていなかっただろうが。

芙蓉はこの人に認められたいと思っていた。今の職に就いて喜んでくれると思っていたが、実際は「そんな怪しげな仕事は辞めろ。みっともない」とけんもほろろの言葉を吐かれた。いかにもこの人らしいと思っただが、やはり寂しかった。

いつかは分かってもらえるだろうと思っていたが、その機会はなくなってしまうた。とても残念だ。

伯父にはたいへん世話をかけた。

特に高校の時。

芙蓉がある問題を起こして、それは結局まるっきりの誤解と分かったのだが、学校に呼ばれて伯父がやってきた。

何故両親でなく伯父が来たかという点、それは芙蓉の家庭事情にあった。

芙蓉（ふよう）美貴は芸名だ。先生に許しをもらって自分でつけた。

本名は益村（ますむら）美貴。いや、現在は本多（ほんだ）美貴。中1の時両親が離婚し、美貴は母親に引き取られ、母親は翌年別の男性と再婚した。相手の男性もバツイチで、中2の美貴には小4の弟ができた。美貴には2つ上の姉がいて、姉は父親に引き取られ、父親も母に対抗するように再婚した。彼女には1つ年上の兄ができた。両親の離婚後も姉にはたまに会っている。父とは、めったに会

わない。別に嫌いなのではなく、これもなんとなく会うのがおつくうなだけだった。

美貴は人が苦手になっていた。

元々独りでいるのが好きな子だったが、それでも姉にはベタベタ甘えていた。この世に姉さえいれば他の人間はいらないとさえ思っていた節がある。

そんな姉と突然引き離された。

シヨックだっただろうと思う。

シヨックで黙り込んでしまうくらい。

姉とはその後も月に1度くらい互いの路線の交わる駅のファミレスで会っていた。美貴の母が再婚し、姉の父が再婚してから、その回数が減った。ひと月がふた月になり、半年近く会わないこともあった。

特に父の再婚後、姉は変わってしまったと思う。美貴の姉ではなくなった。他人になった。知り合いのただのお姉さんになってしまった。

しかしそれを寂しい、悲しいという感情を、美貴も持たなかった。美貴も、変わってしまったのだろう。

今になって思う、両親の離婚と、姉との別れは、少女であった美貴の心に深い傷を付けていたことを。

心の傷は時間をかけて表面に浮き上がってくる。傷を付けた相手ごとつくの昔に忘れ去ってしまう頃に。

そういう事例を先生の下で働くようになってからいくつも見た。自分も例外ではなかったわけだ。

美貴は新しい父親になじめなかった。新しくできた汚らしいガキの弟にも。

新しい父の自分を見る目が嫌だった。

中3の時ビデオで「ロリータ」を見た。戦慄した。劇中のランバート・ランバートに新しい父を重ねた。自分は、ロリータだ。

日々「男」に成長していく弟の自分を見る目も嫌だった。

美貴はブラジャーを着けるのが遅かった。級友に注意されて着けるようになった。姉がいれば、もっと早くから着用していただろう。クラスの男たちが自分をどういう目で見ていたか思い至って戦慄した。

美貴は男を汚らしい物に思うようになった。

「ロリータ」を見てから思い立って合気道の道場に入門した。見学をして、きれいな若い女性の師範のいる道場を選んだ。

美貴は合気道にのめり込んだ。高校受験を控えた大事な時期にそんなことを始めて、父も母もしばらく待てと言ったが、美貴は聞く耳を持たなかった。別にグレたわけではない。むしろ美貴は優等生で、勉強は出来た。あからさまに親に反発するような、そんな幼稚な反抗の仕方を美貴はしなかった。美貴は優等生であり続けた。さらにそこに強くあろうという態度が加わった。そして、賢く強い自分は、相手を無視した。それもあからさまにはない、自分の方が優れているということを確認させて、相手を黙らせるのだ。なんとかわいくない子だっただろうと思う。

当然、美貴は周囲から浮いて、家族から浮いて、孤立した。望むところだった。

独りで生きられる、独りで生きていくと、そう思っていた。

高校は女子校に入学した。県立の女子校の入試など、頭のいい美貴には楽勝だった。

入学当初汚らしい男のいない女子校は楽園に思えた。

事実楽しかったが、失望もした。

醜く汚らしい人間なら女の中にもいた。美貴は当然無視した。無視し続けるつもりだった。

入学からさほど間を置かず美貴は学校のアイドルとして注目されるようになった。美貴は背が高く目立った。顔は整って美しく、武道で身に付いたキリリとした目つきは少女たちに神秘的に映った。

勉強もできた。スポーツも何をやっても上手かった。

あちこちの運動部から入部を誘われ、合気道を理由に断っていたが3年生のしつこい誘いにうんざりし、合気道に近い空手部に入部した。武道系は何故か空手部だけで柔道部や弓道部といったふうにならないうな部はなかった。

空手部の部員たちは喜んだが、他の運動部からのイジメにあった。弱かったからだ。武道系で空手部だけあったのは型が基本で、柔道部のような汗くさい乱取りがなく、畳もいらす、お嬢様のちよつとした格闘趣味を満足させることが出来たからだ。最初からあまりやる気のなかった美貴だが、その仲良しクラブぶりにはさすがに呆れ返った。自分たちから誘ったくせに先輩たちは本格派の美貴を持て余し、美貴はここでも浮きまくり、すぐに幽霊部員となった。

事件はそうした中、さつそく6月に起こった。

有望な美貴を取られて悔しいバレー部の3年が、美貴を賭けて試合を申し込んできたのだ。空手で。一人中学まで空手を習っていたという3年がいて、彼女と有志4人（未経験者）がチームで団体戦を申し込んできたのだ。美貴のまったく関知しないところでの話であり、形ばかりの顧問にも当然ないしよだった。

美貴が話を知って迷惑に思いながら道場に行くと先輩たち4人がぼろぼろ涙を流してしゃくり上げ、チームの大将の部長は真っ青になってガタガタ震えていた。その時点で4対0。もちろん空手部チームの全敗だ。相手の素人4人は快勝に大笑いしていた。

美貴は部長に代わって大将として相手の玄人と対戦することになった。

「本多さんは合気道が得意なんだって？ わたしは5歳から14歳まで空手道場に通っていたのよ。もちろん黒帯を持っているわ。ねえ？こんな馬鹿げた試合止して素直にうちに来てくれないかなあ？」

黒帯の元武道家はデモンストレーションに徒手、突き、蹴りの型を披露した。確かにきれいで、早い。美貴はチラリと自分の仲間の

4人を見た。頬を赤く腫らしている子がいる。道衣の脇腹を押さえ
ている子がいる。美貴は冷たい目を空手家に向けた。

「有段者が、フルコンタクトですか？」

「まさか。ちゃんと寸止めするように言っておいたわ。でも、ご
めんなさい、こっちは素人だから」

美貴は対戦相手の4人を見た。一応かしまっているが噴き出す
のを我慢している。美貴は空手家を見た。

「わたしが勝ったら今後一切わたしにつきまとわないうて約束して
ください。それと、先輩たちにも今後一切手出ししないと、約束し
てください」

「いいわよ。その代わりにわたしが勝ったら・・・」

「いいですよ。約束します」

「そのかっこうでいいの？」

相手のバレー部員たちはジャージ姿で、こちらの空手部は空手着
を着ている。だが美貴は学生服のシャツにベストにスカート姿だ。

「どうぞ」

美貴は見よう見まねの空手の構えを取った。

「部長、審判をお願いします」

すっかり及び腰の部長が泣きそうな声で「はじめ」と言った。

「・・・」

ビュツと黒帯の突きが胸に伸びてきた。しかしそこに美貴はいな
い。踏み込んだ黒帯の頬にピタリと手の甲が当たっている。美貴自
身は黒帯の背後にいる。黒帯の顔に驚愕が走った。

「部長？」

「い、一本！」

空手部員たちから歓声が上がった。

「くっ」

黒帯は美貴の手を払いのけて「キエエイツ」と、武道経験者し
か発し得ない気合いを発して突きと蹴りを繰り出してきた。別に判
定を無視したわけではない。技の寸止めを義務づける伝統空手は三

本勝負が基本だ。フルコンタクト（直接打撃）ルールなら一本で終了だが・・・。

美貴はスイスイと足を引きながら黒帯の攻撃を柳に風と受け流している。黒帯は翻弄されて道場をぐるぐるきれいな円で回った。頭に来た。

「逃げ回ってるんじゃないわよ！ これは空手の試合よ！」

途端に、トンと、美貴の手が黒帯の胸を押さえた。美貴の伸ばした手に黒帯が自分から飛び込んだかっこうだ。「バ・・・」

「一本！」

また空手部員たちから歓声が上がった。

「お嬢様武道が・・・」

美貴の修める合気道は通常試合は行わない。もっぱら型の習得が目的で、その技も受け流しが基本だ。「勝つ」ための武術ではない。争いを収めること、それが合気道の目指すところだ。だが・・・

「バカにするんじゃないよ！」

黒帯は美貴の髪の毛を掴んで引つ張った。美貴もさすがにこの暴拳は予想できなかった。

バシンと黒帯が美貴の頬を張った。

「そら一本！」

バシン！

「また一本！ そら！・・・」

黒帯の体が舞った。美貴の足払いに物の見事にクルンと体が風車のように回転し・・・

「イタ・・・」

黒帯が美貴の髪の毛を放さなかったため美貴も体勢を崩して回転の軸がぶれた。

「グエツ・・・」

黒帯は首から板場に落下した。その上に美貴の体が落ちた。

「・・・」

道場に悲鳴が響き渡った。

救急車が呼ばれた。

伯父が呼ばれてやってきた。

母は末っ子で上に三人の兄がいる。伯父はその一番上で、母とは12歳が離れている。

伯父が来たのは母が相談したからだ。学校に呼ばれるなど初めてのことで、おろおろと兄に電話したのだ。伯父は末の母をかわいがり、娘の美貴をかわいがってくれていた。それが・

「この馬鹿者が！ 武術なんぞやっとなるからこんな暴力沙汰を起すんだ！」

美貴は伯父に教師たちの前でこっぴどく叱られた。呼びつけた教師たちの方が引いている。

「まあまあ、落ち着いてください」

空手部顧問の歴史教師が言った。以前はちゃんと技術指導の顧問がいたようだが、同好会のような今の部にはおらず、この教師もまったくの素人だ。そもそも部の運営に問題があった上、今回の暴力沙汰で相当頭を痛くしている。

「幸い相手の3年生は首の捻挫だけで済んだようですし・まあこれから精密検査をしてみなければつきり断定はできないんですが・、ともかく、事情を聞けば悪いのは相手方で、乗せられた本多君も悪いと言え言えなくもないが・、まあ、仕掛けてきたのは一方的に向こうの方ですから・」

教師の歯切れの悪い説明に、

「だから武術がいかなのだ！武術が！」

と伯父は美貴を叱った。

「武術なんてやめろ！ 金輪際、俺が許さんぞ！！」
一方的に言い渡された。

けつきよくバレー部の3年生は捻挫だけで済んだが、精神的にはかなりまいったらしい。元空手部の先輩によるとすっかり人間が変わったように大人しくなり、レギュラーだったバレー部もやめてし

まったそうだ。かわいそうだが、自業自得だし、それに空手部も即廃部になったから痛み分けた。

晴れてフリーになった美貴だが、まだ2、3勧誘してくる部もあったが美貴が断ると大人しく引いた。

怖い女、

と、美貴の評判が立ったが、やつつけられたバレエ部の3年は陰で「女ジャイアン」と呼ばれる嫌われ者で、少し時間が経つと却って美貴の人気は上がった。人気が下がるのも上がるのも美貴にとっては迷惑なだけだったが。

美貴は相変わらず一人孤高の学園生活を送っていた。

美貴は伯父に言われるまでもなく合気道の道場も辞めた。相手が悪いとはいえケガをさせてしまい、売られたとはいえ喧嘩を買ったのも事実だった。

しかしそれより。

あの黒帯の有段者は決して弱くはなかった。本人も自信満々だったように、相当の実力者だった。美貴はこれまで誰かと闘うということをしてこなかったから半信半疑だったのだが、美貴は強かった。そしてその強さは異常だった。

勘がいいとは自分でも前から気付いていた。それが合気道を通じてより鋭く研ぎ澄まされていった。組み手の稽古をしていると相手の動きが予測して、視えた。優れた武術家ならそうであろうが、美貴は自分のそれは違う物のように感じていた。

美貴は、靈感が強かった。

祖母、父方のおばあちゃんがそうであつたらしい。残念ながら美貴が小学生の頃に亡くなってしまったが。

強いといつてもはつきりいゆる「お化け」が見えるほどのものではなかった。ただ、居る、という風に感じることは多かった。

美貴はその霊的な勘を合気道で磨いてしまったらしい。

武術家として美貴よりあの黒帯の方が数段上だっただろう。しか

し美貴には相手の動きが完璧に視えた。もちろん予測できただけでは勝てない、体が付いてこなければやられてしまうが、美貴には先に相手の意識が視えてしまうのだ。

これは・・・卑怯だろう？

悪いことをしてしまっただと思う。

もっと気をつけていれば相手の髪の毛への攻撃も予測できただろうが、その中途半端さが嫌になった。

伯父の言う通り、武術という場に身を置くべきではないと思った。美貴は合気道をやめた。

さて、美貴は一気に暇になってしまった。たまにクラスメートのグループに誘われてカラオケやショッピングと、女子高生らしい遊びもしたが、どうしても浮いている自分を感じずにはいられなかった。

そういえば、美貴は地元の大娯楽施設、ディズニーランドも苦手だった。

美貴は千葉県在住だった。

田舎の方で、目と鼻の先とは言わないが、それでも今や全国の女子高生たちが憧れるであろうディズニーリゾートの地元である。美貴だって子どもの頃から何度も行っている。

子どもの頃は楽しかったように思う・・・両親の離婚前、姉と別れる前は・・・

今は、楽しくなかった。

これも、嫌いなのではない。自分の心が、この善意に満ちあふれた楽しい夢の世界を、受け入れられないのだ。

苦手なのだ、楽しいことが・・・

美貴だって悩んだ。それじゃあ、自分は、なんのために日々を生きていったらいいのだろう？と・・・

美貴は昼休みと放課後を図書館で過ごすようになっていった。

そういえば美貴は本をあまり読まなかった。子どもの頃は母や姉によく物語の朗読をねだっていたように思う。楽しかったように思う。だから、その後ずっと本が嫌いになっていったのか。この頃になるとだんだん気付いてきた。自分が苦手なものは自分が子どもの頃大好きだったものだ。

再び本を読もうかと思つたのは「2001年宇宙の旅」という映画を見てニーチェに興味を持ったからだ。この映画はたまたまテレビでやっているのを「変な映画だ」と思いながら結局最後まで見てしまった。さっぱり分からなかった。後で忌まわしきあの「ロリータ」を撮った監督の作品だと知ってひどく嫌な感じがした。

その「2001年宇宙の旅」の中で印象的な音楽があつた。クラシックの楽曲で「ツアラトウーストラはかく語りき」という変なタイトルのリヒャルト・シュトラウスという作曲家の作った曲だそう。この変なタイトルが「ニーチェ」の哲学書に関係するらしい。

たまたま歴史の授業で教師の無駄話の中にこの哲学者の名前が出てきて、なんでも「超人思想」を唱え、あのナチスヒトラーに利用されたのだそう。

それをふと思ひ出してどんなものなのか図書館の蔵書を開いてみたのだ。

眠くなる前に頭が痛くなった。分厚い本をパラパラ飛ばし読みした美貴の結論は要するに「強者の論理」で、「強者は強い故に正しい」「弱者は弱い故に悪意を説いて人を貶める」といった調子で、なるほどこれはナチスが大喜びで利用するだろうと美貴は嫌悪感を抱いた。

だが、「強い故に正しい」とした論理は、美貴が合気道に求めたものだった……。美貴は合気道を当初誤解して入門した。あの空手

の黒帯とさしたる違いもなかったわけだ。
美貴はますます道に迷った。

時が過ぎ、2年の秋になった。

美貴は孤高を守りながら、けつきよく流れに任せるまま何もなし得ず、上っ面だけの空虚な学園生活を送っていた。それでも勉強はできたから学校にとっても親にとっても優等生だった。

女の子にももてた。毎日のように下駄箱にファンレターが入っていた。美貴はため息をつきながら律儀にそれを全部読んだ。そういうところがまたモテた。正しくあろうとする美貴は人に誠実であるうともしていた。周りから浮こころうがその態度は変えなかった。

だからクラスの中では笑い物にされることが多かった。

別にかまわない。多くは悪意のない感想だ。よそのクラスでは「イジメ」の噂もあつたが、美貴のクラスにはなかった。美貴に自覚はなかったが、それは美貴のおかげだった。美貴を笑う者の中には悪意のある者もいた。だが「正しく」「強い」美貴に面と向かつて悪口を言えるような者はいなかった。何かあつて、美貴が一つ視線を送れば、その何かはすぐに立ち消えた。口に出さないまでも美貴に憧れと感謝の視線を送るクラスメートは数人いた。そうした視線にも美貴はまるで揺らくことはなかった。美貴はただ純粹に「自分」であるだけだった。ただ、「自分」がどこに向かつてどうあるべきなのか、その迷いは常にあつたが・・・。

昼休みと放課後の図書館通いはすっかり毎日の日課になっていた。やはり小説を多く読んだ。あまり重い文学物は眠くてたまらず、エンターテイメントの推理物やSF、ファンタジーを多く読んだ。大した読書家ではない。

歴史物も読んだ。哲学書よりよほど人間存在に対する答えが多く含まれているような気がしたし、そもそも人間存在に意味なんてないようも思えたが。

図書館に通いながら、美貴には一人、気になる人がいた。

同学年の生徒だ。2年になるときのクラス替えで彼女と同じクラスにならないかと心密かに期待したが、また違うクラスだった。

彼女は住友理子（すみともさとこ）といった。

物静かな少女だった。色白の肌にまつげの長い目。本ばかり読んでメガネをかけている。小さなお人形のような唇が赤い。本を読みながらブツブツ何か呟いている。

美貴は本を読む振りをしながらこっそり彼女を覗き見ていた。

彼女を見ていたかった。

彼女を見ていると何か心ときめくものがあつた。

ガラス玉の中に一つだけ混じつた宝石を見つけたように思った。

自分だけが知っている綺麗な、宝物。

「お姉さまになつてほしいです」

と、下級生からのファンレターによく書いてある。ファンレターのほとんどは1年生からだ。

お姉さま・・・

彼女たちは自分にいったい何を期待しているのだろうか？と不思議に思った。たまに会う姉のことを思った。姉との会話はスムーズだった。お互いの近状報告。しかしそれだけだった。いっしょにいた、家族だった頃の、濃密な親しさはすっかり失われていた。

お姉さま・・・

お姉ちゃん・・・

姉に感じていた濃密な親しさ、その関係を彼女たちは望んでいるのか？

無理だ。美貴は人が苦手だ。男も嫌いだし、女の子の相手も疲れる。

美貴は一人がいいのだ。一人が似合っている。

・・・本当にそう思っているか？

本当に人を遠ざけ、独りがいいと思っているか？

孤独感を、

彼女を見ていると思いついてしまう。

平気だった独りであるということ、彼女を見ているとひどく苦しく思う。

こんな風に毎日図書館にいて、あなたは寂しくないの？と問いた
い。

いえ、あなたは本を読むのが好きなのね。とっても楽しそうに
しているもの。

わたしはね、そんなに好きじゃないうよ。

他にすることがないから本を読んでいるだけ。

人との関わりが煩わしいからここに避難しているだけ。

本当はね、

寂しいのよ。

本当はね、

あなたと親しくなりたいのよ。

あなたを見つめる視線に、気が付いて。

.....

が、美貴は目を逸らす、ふと彼女が本から顔を上げた時に、持ち
前の鋭い勘でそれと予知して。彼女は疲れた首を運動させてまた本
にうつむく。小さな唇が無意識に文字を辿り、時折、微笑む。

その微笑みをわたしに向けて。

その唇を、わたしに.....

「あ~~~~~」

まったく毎日毎日こんな手紙ばかり読まされているから変な気持
ちになってしまうのだ、と美貴は律儀に下級生からのファンレター
に目を通す。

お姉さま.....

わたしが誰かの「お姉さま」になってあげたら、この手紙攻撃は
無くなるのかしら？と思う。どんなことをしてあげたらいいのかし

ら・・・

ふと、一通の封書に惹かれた。他がかわいいピンクだの水色だの封筒なのに対して、それは白い事務用の封筒で、ていねいな綺麗な文字で「本多様」と書かれていた。

あなたの好きな本はなんですか？

便せんにそれだけ。

美貴が図書館に毎日通っているのはファンなら誰でも知っているだろう。何を読んでいるのか興味もあるだろう。

美貴は彼女、住友理子のことを思った。

その封筒に返事を書いて入れた。帰りに下駄箱に入れておいた。

翌日放課後。

「嘘よ」

美貴が言っていると住友理子はビクツと顔を上げてカァーツと真っ赤になった。美貴は笑って言った。

「絶対誰も読まない本を選んだだけ。目立って、すぐに犯人が分かるようにね」

それは分厚い、「夢野久作全集」ドグラマグラ」だった。

住友理子は何か言いたそうにしながら言葉が出てこないようだった。

「来て」

美貴は周りの目を邪魔に思って理子の腕を取ると立たせた。理子は置きっぱなしの本とカバンを気にしながら美貴に引っ張られるまま書架の奥に連れ込まれた。めったに誰も来ない哲学書のコーナーだ。

「わたし1組の本多美貴。知ってるわよね？」

理子はうなずいた。

「わたしは・・・」

「3組の住友理子さん。知ってるわ。あなたの好きな本は、『モモ』
『人間になりたがった猫』『時の旅人』『トムは真夜中の庭で』
『床下の小人たち』『クローディアの秘密』『くるみの国滞在記』」
得意になって言う美貴を理子は小さく睨んで、笑った。

「やつぱり・・・」

「ばれてた？」

美貴はその本たちを理子の後を追って図書館で読んでいた。二人は笑い合った。理子は言った。

「でもわたし読んだわよ、あの本」

「ドグラマグラ?!」

「ええ。中学の時に。おかげで3日間熱を出して寝込んだけど」

「わたしは50ページ読まないうちに目眩がしてきてギブアップしたわ」

「そうか、読んだんだ・・・と考え込む美貴に理子はまた笑った。

「本多さんって面白い人ね。もつと・・・恐い人だと思ってたわ」

「美貴って呼んでくれる? その方が嬉しいんだけど」

「じゃあ、わたしは理子って呼んでくれる?」

「理子」

「美貴」

二人は見つめ合って嬉しく微笑んだ。

それから二人は昼休みと放課後をいつも二人で過ごした。楽しかった。理子は美貴の読書の先生になった。面白い本を紹介してくれ、その感想を聞いてくれた。美貴も理子の話をたくさん聞きたがった。理子の本に関する知識は膨大だった。ファンタジーとSFを中心に、それもハードなものからソフトなものまで幅広く読んでいて、その読み方も奥深く、理子の言葉はイメージに溢れていて、物語を読むより面白く、心地よかった。理子の言葉と、声と、表情が、やがて二人が「つき合っている」という噂が広がり、好奇の目が

向けられたが、美貴には却ってそれが心地よかった。下級生から「恋人なんですか?!」という涙ながらの手紙を受け取ったりもした。「そうよ」

と美貴は心の中で微笑んだ。

「理子はわたしの恋人。わたしの大好きな彼女。わたしだけの大切な宝物」

と。幸い理子は目立たない存在だった。地味で大人しく。その光り輝く魅力を美貴だけが知っている。自分だけが独占している、理子にとって自分が特別な存在であることが誇らしく、嬉しかった。恋をしていた、と思う。

しかし幸せな時は存外続かなかった。

春休みが終わり、3年になると、理子は図書館に現れなくなった。クラスに新しい友だちができたようだ。美貴が1年の一時期そうだったようにその友だちにつき合っただけでカラオケに行ったりしているらしかった。

美貴は寂しかったが、理子にそれは言えなかった。自分たち二人きりの世界に閉じこもるより、多くの友だちとつき合っただけで外に世界を広げていく方がいいだろう。

そういうことを、3年になって周りのクラスメートたちを見ていて感じた。

理子とは廊下ですれ違っても軽く挨拶を交わすだけで、二人の親密なお付き合いは終わってしまったようだった。

理子にはいつも同じクラスの友だちが付いていた。

廊下ですれ違ったときその友だちが自分のことを何か言って笑っていたようだ。

理子も・・・いつしよに笑っていたのだろうか・・・

美貴も図書館に行かなくなった。3年になって「受験勉強」という言い訳ができた。一流校を目指すクラスメートの中には1学期早

々から教科によって授業に出てこない者もいて、教師もそれについて何もとがめなかった。別のところで自分の勉強をしているのだから。そんな雰囲気の中美貴も他の者に煩わされることなく一人でいられた。ファンレターの数もめっきり減った。美貴も、それを讀まなくなった。

どんどん自分を孤独に追いやっていた。

理子のいない世界では孤独に浸っていたかった。

部屋で、ふと、涙を流した。

あんなに仲が良くて楽しかったのに、

どうして、

わたしを裏切ったの。

美貴は孤独に泣いた。

寂しかった。

夏休みも受験勉強で過ごしていた。

最後の一日。前夜に思いがけず理子から電話がかかってきた。

『明日、よかったら、デイズニーランドに遊びに行かない？ 二人で？・・・』

美貴は「うん。行く」と返事した。嬉しかった。

開園30分前にゲート前に着いたが、もう長蛇の列ができていた。けれど待っている間もこんなにワクワク楽しかったことはない。となりに理子がいる。美貴は笑顔を向けた。何事もなかったように。理子が自分の元へ戻ってきてくれた。嬉しかった。理子もニッコリ笑ってくれた。自分の知っているそのままの理子だった。嬉しかった。

入場してからもどこへ行っても長蛇の列だったがめげずに乗り物に乗り続けた。スペースマウンテンやビッグサンダーマウンテンでキヤーキヤー悲鳴を上げて楽しんだ。ワンマンズドリームのシヨウをうつとり眺めた。美貴は自分がこんなに女の子だったとは知らなかった。パレードのダンサーたちに誘われて理子といっしょに踊っ

た。美貴は誰より上手かった。ダンサーたちよりも。理子は目を丸くして喜んだ。嬉しかった。

食事を楽しみ、夜のパレードを見た。シンデレラ城のシヨウを見て、花火を見た。美貴は理子の手を握り、言った。

「好きよ。理子」

理子は花火を見上げたまま、

「ありがとう」

と、美貴の手を握り返した。

花火は綺麗だった。その色とりどりの光に照らし出される理子の横顔は、さまざまな宝石のように綺麗だった。

自分の、理子だ、・・・と、美貴は思っていた・・・

翌日の始業式、理子の姿はなかった。美貴は昨日遊びすぎて熱でも出したのかしらと心配した。

教室に帰って担任教師の話を聞いているとき、美貴は突然物凄い不安感に襲われた。明らかに何か変だった。視界が異様に暗い。耳鳴りがして、自分の心臓の鼓動がガンガン響いた。美貴は立ち上がり、早退を告げるとカバンを掴んで駆けだした。

住所を当てに理子の家に行った。初めて理子の家に来た。ごくふつうの一軒家だった。

呼び鈴を押したが返事はなかった。鳴らし続けていると隣の家の主婦が怪訝そうに顔を覗かせた。美貴は頭を下げて訊いた。

「今日、理子さんは家を出ましたか？」

主婦はああそつえばと言った。

「朝いったん出て、1時間位して帰ってきたみたいだったわねえ」

美貴は庭に回るとガラス戸を蹴り割った。主婦が悲鳴を上げた。

美貴はカギを開けて土足で上がり込み、風呂場に向かった。

居た。

理子が。

左手を入れた浴槽の水は真っ赤に染まっていた。

理子は救急車で病院に運ばれた。パートに出ていた母親に連絡され病院に向かった。

美貴は警察署で事情を訊かれた。そのまま答えた。当然信じてもらえなかった。

学校から美貴の担任が呼ばれてきた。理子の担任はまず病院に向かった。理子は、まだ死んではいなかった。

伯父も来た。また母が頼ったのだ。

美貴はまた伯父にこつてり叱られた。2年前のことを持ち出されて「おまえはあんなだから」と言われた。伯父にしてみれば警察に言われるより身内から言ってしまった方がというつもりだったかもしれない。事実警察は美貴を疑った。理子の部屋の机の引き出しから遺書らしき書き置きが見つかったのだ。そこには『ごめんね、美貴』とだけ書かれていた。少なくとも自殺の原因を美貴が知っているはずだと信じられた。

美貴にはまったく心当たりがない。

じゃあ何故彼女が自殺を図っていると分かっただんだ？と厳しく問われた。

何故か？なんて分からない、自分には、分かっただい！

どうせ、誰にも分からない！

わたしのことなんてっ！！！！

じきに美貴の疑いは晴れた。理子の自殺の原因が分かっただい。

理子は妊娠していた。

自殺を図ったせいでお腹の子は流れてしまったが。

理子は、ずっと生死の境をさまよっていた。

美貴は警察から解放された。伯父は美貴にすまなかったなと謝った。美貴は冷たい顔で何も答えなかった。美貴だって誰よりシヨックを受けていたのだ。

また、心の傷が深くなった。

蒼白の頬に一粒だけ涙が流れた。

理子の運ばれた病院の前に立った。もう夕刻だった。窓に明かりが灯っている。理子はどの窓に居るのだろうか？ いや、まだ集中治療室の中だろうか・・・。

立ち去ろうとした美貴は一人の男の子に声をかけられた。自分と同じ年頃の高校生。

「君、もしかしたら美貴さん？」

「誰？」

「俺、北高の森っていうんだ」

「だから、誰？」

美貴の冷たい問いに高校生はムツとして言った。

「理子の彼氏だよ。理子、ここに運ばれたんだって？」

美貴は無言でいる。

「自殺しようとしたなんて聞いたけど、嘘だよな？ 理子がそんな

ことするわけないよな？」

美貴は怒りを感じた。

「本当よ。手首を切って、浴槽が真っ赤になっていたわ」

高校生はシヨックを受けてよろめいた。

「な、なんだよ、それ……。ど、どうしてだよ？ どうしておまえが

そんなの知ってるんだよ？」

知ってる？ だと？ わたしは何も知らなかった、理子のことを、

何も！

美貴は無言で睨んだ。

「なんだよ……。やっぱりおまえのせいなんだな？ 理子が自殺な

んかするわけないんだ、俺たちは愛し合っていたんだ！ おまえが

理子に何かしたんだろう！？」

美貴は無言でいた。こんな男が・

「おまえが理子を死なせたんだ！ おまえのせいだ！！・・・」

男の目に脅えがあつた。美貴に対しての脅えではないだろう、理

子の自殺を自分のせいにはされたくないだけだ。こんな男が、こん

な男が、理子を、愛し合っていた、だ？

美貴はビュツと拳を突き出した。物凄い風圧に頬をなぶられ、高

校生は今度こそ美貴に怯えた。

「な、なんなんだよ、おまえ・・・」

腰が抜けそうにしている高校生に背を向けて、美貴は病院を去つた。

「おまえのせいだ！」

まだ声が投げつけられた。

「よくも俺の理子をひどい目に遭わせやがったな！」

おまえこそ、よくもわたしの理子の体に傷をつけてくれたな！

美貴は戻って行って今度こそ本当にぶん殴ってやりたい激情を必死に抑えた。

わたしの理子……ちくしょう！……

家に帰ると美貴は自分の部屋に引きこもった。母親が心配して様子を見に上がってきたが答えなかった。

『ごめんね、美貴』

なにが、ごめんね、なんだろう？

自分一人が美貴を置いて大人になってしまったことがだろうか？
美貴も感じていた、クラスの女の子たちを見ながら。

1年2年の頃と比べて見違えて綺麗に、女性らしく変身した子が何人もいた。

大人になったのだろう……

別に下世話な意味でなく、大人の女性としての意識を持って自分の人生や生活や自分自身を、見るようになったのだろう。

美貴は、中学校の頃から全然変わっていない。

大人っぽく見られていたが、それは見た目だけだ。背伸びして、周囲と折り合えず、孤立している今の自分はまったく子どもじゃな
いか？ 全然成長していないのだ。

今は、周りの女たちがみんな自分より大人に見える。背だけは美貴がクラスで一番高いが。

ああ、嫌になった。何もかも。子どもの自分も。

むしゃくしゃして、テレビのリモコンを押した。思いつきく
だらない番組を見て思いつき悪態をつけてやろうと思った。

やっていたのは「ほんとうにあった心霊事件ファイル」という実

にくだらない番組だった。

心霊現象Ⅱお化けを扱ったオカルトバラエティー。

美貴はこの手の番組が大嫌いだった。

子どもの頃、家族が別れる前、姉はよく喜んでこういう番組を見ていた。姉には美貴のように靈感は受け継がれていないらしかった。美貴は姉の背に隠れて怖がっていたが、恐かったのは、自分がそういう世界に引き込まれていくことだった。自分がよく感じるモヤモヤとした黒い不安、その姿をはつきり見たくなかったのだ。

もうどうでもいい……

ベッドの上でふてくされて芙蓉は小さなブラウン管テレビに見入った。

不意に、美貴の目が大きく見開かれた。視線が釘付けになり、離せなくなった。美貴は慌てて起き上がり、まっすぐ画面を見つめた。

天使が、そこに居た。

いや、女神か……

『紅倉先生』と、その女神は呼びかけられた。

ああ、そういえば……と思い出された。クラスメイトたちの会話でその名前を聞いたことがあった……。たしか……べにくら……みき……

この人が、それか。

人間離れた、まさに天上の天女の美貌だった。銀色の髪をして、真っ白な肌をして、丸い頬に尖ったあごをして、鼻が高く、丸くお人形のような唇をして、まつげの長い大きな目の瞳が……緑と紫が混じったような不思議な色をしていた。細い首に、きゃしゃな肩。

この人は、絶対人間じゃない！

ある種のショックを覚えながら美貴は強く思った。

美貴は夢中で彼女に見入った。

紅倉は心霊写真の鑑定中らしかった。

じーっとならんと覗き込むカメラに、紅倉はふいと視線を上げた。ちよつと呆けたような表情。そうだ、確か彼女は目がほとんど見えな
いんだ。しかしその目が、きゅつと、カメラを、美貴を、見た。美
貴はドキンと胸が鳴った。紅倉はニコツと美貴に天使の顔で微笑み
かけた。美貴の胸が高鳴った。

紅倉が言った。

『これはたいへん良い写真ですよ』

女の司会者が問う。

『悪い霊ではないんですか？ 鑑定を依頼された方はたいへん怖が
つていらつしゃいますか？』

『どうぞ、ご安心を。ここに写っているのは、天使です』

『天使ですかあ!?!』

司会者の驚きの声と共に画面にはその写真が映し出された。若い
カップルが窓の外の夜景をバックに笑顔でブイサインをしている。
高いビルらしく外には高層ビル群の窓明かりが広がっている。なん
のヒントも必要とせず美貴はその左上の黒い空を見た。そこに灰色
の渦が巻いて、なんだか人が叫んでいる顔に見える。・・・とうてい
これが天使には思えないが・・・

『本当ですかあ?』とスタジオでも疑問の声が湧く。紅倉はスタ
ジオの声を無視してテレビに向かって天使の笑顔で言った。

『美しいあなた』

美貴の胸が三度高鳴った。美しいあなた・・・美しい貴方・・・美し
い貴方・・・美・・・貴・・・紅倉がニコリ微笑んだ。美貴の背に
ゾクリと電気が流れた。

『ちよつと・・・右手を出してくださいませんか?』

美貴は、右手を持ち上げ、

『開いて、画面に向けて』

手のひらを開いて、画面に向けた。

『ちよつと、借りるわね』

美貴はギョツと身をのけ反らせた。開いた手のひらから、何か

抜き取られた？！

・いや、美貴の体から、何か、エネルギーのような物が、放たれたのか？・・・

『はい、出来上がり』

紅倉はカメラに手元の写真を示した。

『あ、これは？！』と司会者から驚きの声が漏れる。

左上の灰色の渦が、金色の光の放射に変わっていた。

『先生、手品と違うんですかあ？』とゲストから疑問が問われた。

紅倉はおほと童女のように笑った。

『まあ、確かに手品でしたわね。でも、これは間違いなく天使の光ですよ。はい、写真のお二人さん、これで安心ですよ』

『じゃあさっきのままじゃやっぱり・・・？』

うふふ、と紅倉は悪戯っぽい笑顔をテレビに向けた。

『ありがとう。美しい貴女。お礼に、わたしの女神さまが一つ、貴女の願いを叶えてくださいますよ。さあ、何を望みます？』

美貴は混乱した。これは、夢か？こんな番組がまさか生放送じゃないだろう？

現に明らかに編集されている。それなのに、これは、まるで・・・

自分に語りかけているようじゃないか！？

紅倉は優しい笑顔を美貴に見せている。

美貴はうなずき、祈った。

願いは決まっている。

・・・・・・

スー・・・ツと、天上からあの金色の光が差した気がした。

『はい。確かに願いは聞き届けられました。でも、それは貴女の力なんですよ』

『先生、さつきから誰に話されているんですか？』

『ウフフ、だから、美しい、あ・な・た。ね？』

美貴は、奇跡を信じた。

『じゃ、次行きましようか？』

「はい。では次の鑑定依頼です。拝啓、番組スタッフの皆さん、紅倉先生。・・え、先生は他にもいらっしやるんですが、紅倉美姫先生、大人気ですねー。えー、先生に是非視ていただきたい写真があります。それは・・。」

番組は続く。紅倉は何事もなかったように軽やかに優しい表情で心靈写真の鑑定を進めていく。美貴は、もう彼女以外まったく目に入らなかった。

翌日登校すると担任に呼ばれ、理子の容態が持ち直したと伝えられた。もう命はだいじょうぶだろうと。美貴は、嬉しかった。

その後理子は二度と学校に来ることなく退学した。美貴もその後会うことはなかった。

一通だけ手紙を出した。

貴女の幸せを心から願っています。

その一文だけしたためて。

年が明けて三月。美貴は国立大の入学試験に受かった。

入学手続きの書類を送らなければならない。

美貴は迷って、テレビ局宛に一通の手紙を速達で送った。1週間待って返事がなければきっぱり諦めようと思った。だが、3日後に速達で返事が来た。東京都内のある住所が記されていた。

美貴はあの番組の担当者宛に紅倉先生の下で働きたいから紹介してくれと依頼する手紙を送ったのだ。

まさか返事は来るまいと思ったら、来た。

そしてその日のうちに居ても立ってもいられず住所を訪れた。某高級住宅街の広いお屋敷。白壁の続くその敷地面積に美貴は圧倒された。テレビで見た紅倉美姫の印象とはだいぶズレがあった。その馬鹿でかい屋敷はひどく俗物に思えた。ためらいが生じたが、インターホンのスイッチを押した。表札はなかった。サーーッとスピ

「カーから機械音が聞こえたが、返事はなかった。帰ろうかと思っただが、ふと、扉を押したら、あっけなく開いた。恐る恐る広い庭を通って玄関の呼び鈴を押した。中でベルの鳴る音が聞こえたが、誰も出てこなかった。」

「ごめんください」

引き戸を開け呼びかけたが、それでも誰も答えなかった。

美貴は心配になった。これだけのお屋敷で誰もおらず、戸締まりもされておらず、何か事件かと思った。

きゃしゃな紅倉の天使のような笑顔が脳裏に浮かんだ。

「先生！」

美貴は屋敷に上がり込み、

「先生！ 紅倉先生！ どちらですか!？」

と大声で呼ばわって駆けめぐった。

紅倉美姫は、台所で膝を抱えて丸くなっていた。

美貴は驚き、なんと行って良いやら、びっくりしたまま、

「あの・・・わたし、本多美貴といいます。あの・・・先生のお弟子にしてください!」

と、勢いよく頭を下げた。

ギョウ~~~~、と、音がした。は？と美貴は顔を上げた。

紅倉美姫はか細い声で美貴に言った。

「おなか・・・すいた・・・」

それが、二人の出会いだった。

喪服の美貴は思わず思い出し笑いをした。

あの時の先生だったら、通いのメイドさんの用意していったお料理が分からず、寒がりなのに暖房の付け方も知らず、お腹が減って、寒くて、子どものようにべそをかいて丸まっていたのだ。

まったく、なんて人だろう。

美貴が料理を温めてやるとよほどお腹が空いていたようだった

いて食べた。そしてお腹を壊して2時間トイレにこもっていた。美貴は家に電話をかけて友だちの家に泊まると告げた。大学に受かったばかりなので母もうるさいことを言わずに許可した。

呆れたことに先生は美貴が誰か知らなかった。食べている間に美貴が話したことをまるで聞いていなかった。新しいメイドと思っただらしい。怒られるのが怖くて無理やり急いでがつついたようだ。トイレから出てきてげっそりした先生に改めて説明すると、いきなり慌てだし、毛布に隠れるようにして美貴を見た。

「居てくれる？ わたしの側に？・・・」

紅倉が人を恐れるのは最初に会ったときから分かった。

美貴は、心からの笑顔で言った。

「居させてください。先生のお側に」

こうして美貴は紅倉美姫先生のアシスタントに就職した。

大学入学は辞退した。父母は慌て、考え直すように強く言ったが、美貴の決心は変わらなかった。

決心なんていうほどのものではない。美貴は、嬉しくて仕方なかったのだ！

美貴が求めていたものを、先生は全て与えてくれた！

美貴は、心から笑うことが出来た。

家族が別れてから決して感じるこの出来なかった安らぎを、先生はいとも簡単に与えてくれた。

それは、先生が心から美貴を頼ってくれること。美貴を、この世で一人自分だけを、特別に必要としてくれること。

美貴が、望み、・・・失ったもの・・・。

先生は、すべて、与えてくれた。

美貴の幸せは、ここにある！

「なんですか、不謹慎に」

母にたしなめられた。葬式は済んで、会場を移しておとき（葬儀後のふるまい）の最中である。和んだ席だが、伯父はまだ、そこ、

棺に居る。

親せき、知り合いが集まる席に、本多の父と弟、姉と益村の父もいた。さすがにあちらの奥さんとお兄さんはいなかったが。本多の父と益村の父も礼儀正しく、特にわだかまりもなく故人の思い出を語り、それぞれの近状を話した。高校生になった弟と大学生の姉も仲良く会話している。母はちょっと居心地悪そうにあちこち挨拶に飛び回っている。

美貴は和やかな心で父たちと姉弟たちを眺めた。一時嫌悪感を抱いていた父と弟だが、父は新しくできた年頃の娘にどう接したらいいか戸惑っていただけだし、弟も急にできた美人過ぎるお姉さんにドキドキしていただけだ。二人にとって今や美貴は自慢の種だ。

「あーあ、あんた上手いことやったわねえ。あんな車運転して。あたしも来年就職なのよね」。あーもう、胃が痛いわ」

と、姉に愚痴られた。たしかに美貴は最新ハイブリットカーの最上級モデルに乗っている。もちろん美貴の持ち物ではなく、美貴はあくまで先生の運転手だが。先生のアシスタントになってからすぐに運転免許を取った。いきなりこの高級車を運転させられてびびったが、美貴は運転が上手かった。先生も美貴の運転する車以外では絶対に外出したがいなかった。

美貴は今ふつうに笑うことが出来る。親しい者たちに対して。

伯父に最後の別れを告げた。棺の窓から白い顔を覗くと、伯父が微笑んだ。まだまだ若すぎる死で残念でならないが、こうして、ようやく認めてもらえた。

「お世話になりました。伯父さん。さようなら」
寂しいが、美貴も微笑んで別れを告げられた。

火葬も済み、美貴は家に帰ってきた。

「先生、帰ってまいりました。お昼は食べましたね？ はい、けっこうです。ではわたし、ちょっと買い物に行ってきます」

特に必要もなかったのだが。

帰り道、赤信号の合間に街並みを眺めていると、お菓子屋でチョコレートの値引き販売の張り紙が目に入った。2月17日。伯父は14日、バレンタインデーに亡くなったのだ。

安売りされる売れ残りのかわいそうなチョコレートたち。
思い出した。

2年の2月、美貴は理子からバレンタインデーのチョコをもらった。美貴は3月のホワイトデーにキャンディーをお返しした。ラブラブだった二人の、最後の、純粹に楽しい思い出だったかもしれない……。

売れ残りで悪いけれど先生にチョコレートをプレゼントしようと思った。本当は準備するつもりだったのだが、なんとなく恥ずかしくてまごまごしていたら伯父の危篤の知らせが入って、14日にはプレゼントできなかった。

チョコレートなら先生でも食べられる。たくさんはダメだが。

ホワイトチョコにしようと思う。

そういえば美貴の芸名、芙蓉（ふよう）は、先生の香水にちなんで決めた。幼い頃美貴は白い芙蓉の花をバラと間違えて姉に教えられたことがあったのだ。「薔薇美貴」じゃなかったので、真っ白な芙蓉の花を思い出した。先生の身にまとう薔薇の香水のように、芙蓉も先生に常に寄り添い、守っていかうと思ったのだ。

芙蓉美貴。美貴はこの新しい自分の名前をとても気に入っている。先生に渡すチョコレートを選びながら、芙蓉はとて華やい気分である。
少女のように。

終わり。

下（後書き）

*自己申告。今回辞書で調べて勘違いが判明。芙蓉って、薔薇のことじゃありませんでしたっけ？ ハイビスカス？ そうだったんだあ！？ガアア〜ン・。実はずーっと思いついていました。横溝正史に「芙蓉屋敷の秘密」という作品があるんですね。それをバラと勘違いしたのかなあ？。でも「バラ美貴」や「ソウビ美貴」じゃかつこわるいし、やっぱり「フヨウ美貴」がいいなど、ね？ああバカな作者でごめんよ。

ちなみに『くるみの国滞在記』という本はありません。あしからず。

ありがとうございました。（2008/2/5）

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5812d/>

薔薇の独り言

2008年11月7日08時23分発行